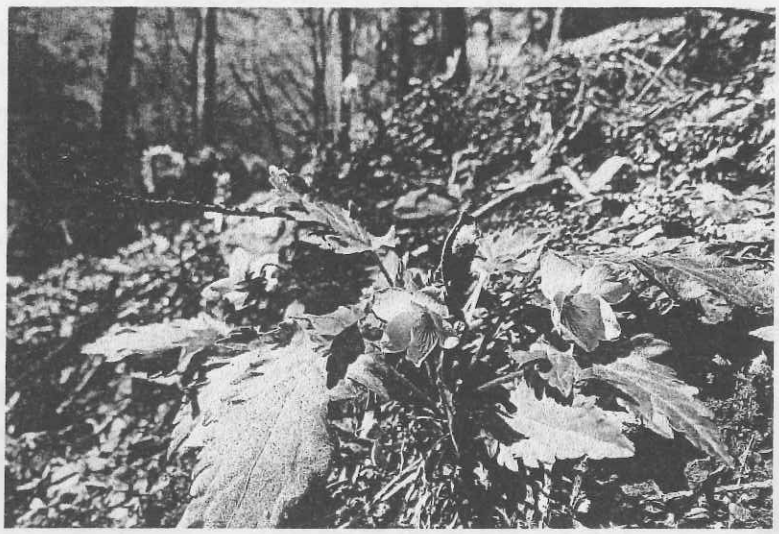
来さのせん
奥多摩
《第51号》
平成30年10月15日
(一社)奥多摩観光協会

自然の一端を見る（スミレ）



オクタマスミレ　（※ヒナスミレとエイザンスミレの交雑種）

奥多摩町は川井・丹縄の標高２００m強から、雲取山２０１７mまで、標高差は１８００mに及びます。この会の活動範囲である多摩川源流域まで含めると標高差は２０００mを楽に超えます。この標高差があるため、植林が多いとは言いながらも多様な動植物が生息・自生しています。東京都の最高所でもある雲取山の北面（東京都側）には亜高山性の針葉樹の原生林が広がり世代交代している姿を見ることができます。またタカネザクラなど奥多摩の高所でしか見られないサクラや、林下ではオサバグサ、バイカオウレン、ウスギオウレンなど東京都では奥多摩でしか見られない植物も数多いです。植物も見だせばきりがなく、全てを覚えようと考えるのは相当無理な話で、それぞれが興味を持てそうな植物に目を向けるのが妥当なところでしょうか？

ここではスミレに的を絞り見てみます。春先から花を付け私たちの目にも触れやすく、花の中では割と馴染み深いでしょう。奥多摩でも多く自生し基本種３０種くらいに、変わり花や交配種を併せると５０種くらい見ることができます。標高差があるので低地のスミレから鷹巣山頂周辺の草原帯では高原性のシロスミレ、また雲取山頂周辺では高山性になる黄色いスミレ（高山ではスミレは黄色が主となる）キバナノコマノツメも自生しています。

スミレは明るい日当たりを好むアケボノスミレやサクラスミレ、半日陰を好むヒナスミレやナガバノスミレサイシン、湿り気のある日陰を好むシコクスミレなど、種類により微妙に棲み分けています。咲く時期も種類によりかなり異なり、３月上旬にアオイスミレが咲き始めると次から次へと咲いていき、最も遅く咲くシロスミレは６月下旬頃までと、かなり長期に渡り花を見ることができます。数も多いので山歩きで見る機会も自然と増えます。

また、スミレの興味深いところは、違ったスミレ同士が自然交配し交雑種が生まれるということです。交雑種は種子を作れず一代限り３－４年で消えてしまうことが多いようですが、ナガバノアケボノスミレなど世代交代している種も見受けられます。交雑種はいつどこで生まれるか分からず、気を配りながら歩いていないと見過ごしてしまうことも多いのです。

スミレも他の植物と同じく生存競争のただ中にいます。普段思っている環境と違う環境で出会った時は、スミレも懸命に命をつなぎ勢力を伸ばそうとしているのでは？と歩きながら思いを巡らせたりします。交雑種もそうした中で生まれてくるのでしょうか？

来春から山行きではスミレを見る楽しみを増やしてみてはいかがでしょうか？

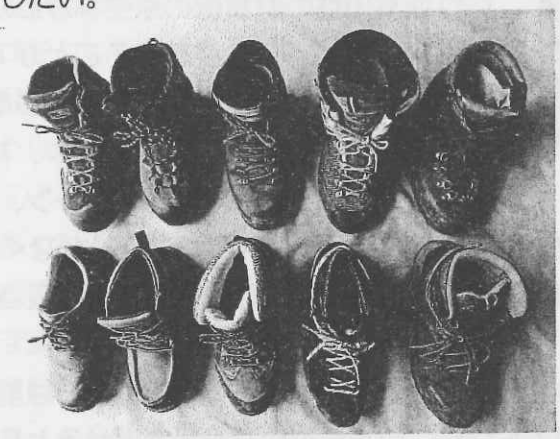
（堀口　行雄）

奥多摩山歩き
～ワンポイントアドバイス～

秋たけなわ、奥多摩が一番装う季節到来。今回は山歩きで最も大切と言われる登山靴に焦点を当て、その種類と購入・手入れと保管にも触れてみたい。

登山靴の種類　下の靴の写真は紙面の都合上いずれも右足用のみ。上段の右端及び左から2、3番目と下段の左端は天然皮革である。他は化繊と合成皮革を組み合わせたいわゆるゴアテックス仕様の軽量登山靴。また、下段の左端はローカットのタウンシューズで、山歩きには不向きである。一般に重いザックを背負うときはしかりした靴が原則である。

日帰り程度のハイキングなら下段の右2足（ミドルカット）でも良いが、夏山での縦走や宿泊を伴う場合は、上段のハイカット仕様で自分の足首をも保護したい。



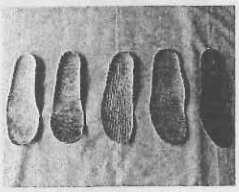
更に次は写真左から順にクライミング用、フエルトソールの沢登り用、雪山用そして右端はそのインナーである。このインナーは凍傷予防だけでなくテント泊での内履きとしても重宝する。クライミングや沢登り、また、雪山ではそれぞれに相応しい履物を準備し、試着を繰り返して本番に備えたい。

冬山登山では、関東地方においても6本～１２本爪のアイゼンが必要である。アイゼンの購入に際しては、必ず靴を持参して確実にフィットするものを選びたい。

靴の購入　登る山のレベルに合わせ、自分の足に合った登山靴に出会えると以後の山登りは一層快適なものとなる。逆に違和感のある靴では後悔する。

予算は兎も角として、どれくらいの頻度でどのレベルの山に登りたいかを吟味し、前半で見てきた靴の種類を参考におおよその購入計画を立案したい。そのうえで専門店に出向きスタッフのアドバイスを受けながら、じっくりと試し履きをされたい。

具体的には、靴下と共に履いて斜面を歩き自分の足に違和感を覚えないことの確認が大切である。毎日数万歩も歩くのであるから、少しでも違和感があれば靴擦れの原因になる。しっかりと吟味しよう。しかし、それでも自分に合った靴が見つからない場合、人によっては左右の足で数ミリの違いが認められる場合もあるので、採寸のうえ思い切ってオーダーメイドとしたい。幸い都内には登山靴を注文製作する専門店もある。



次に、靴のクッション性と足のサポートに欠かせないのが、インソールである。新しい靴を購入するとき、最初から セットされているものも多いが、高さや幅・奥行き弾力等様々なタイプがあるので、自分の足の特徴と靴に合わせて選択して欲しい。

手入れと保管　快適な山歩きを続けるためには靴のメンテナンスは欠かせない。一日の登山を終えたら汚れや靴底に挟まっている異物を取り除き、時には靴紐も外してブラッシング、さらにインソールを外して陰干しにする。その後は靴の素材に合った撥水剤をスプレーしておきたい。例えば前述の１２種の靴のうちで、上段真ん中のヌバックレザーではそれ専用のオイルを塗るなどの手入れが欠かせない。

左の写真は帰宅後充分乾燥させず、次回の山歩き中に剥がれた靴である。登山靴は靴底からの衝撃を和らげるためEVA樹脂（エチレンビニールアセテート）をクッションとして使用しているものが多い。かつてはこのクッションにポリウレタン系の材料が、また接着剤には最近までこの樹脂に起因するものが使われていた。湿気の多い我が国では、この素材が加水分解を起こし剥がれたものである。暑い夏、締め切った自動車の中に放置し、また密閉した箱の中に大事に保管する等は言語道断である。家の中でも風通しの良い所に保管して次の山歩きに備えたい。　（冨士　光男）

～奥多摩の地質 その2～

2. 奥多摩の地質概要

1. 地層・地形

図-1 の通り、地層は帯状をなし、走向は北西から南東、傾斜の大半は 40～80 度で北東側へ落ちています。そして奥多摩のほとんどの尾根や日原川等の川の向きもこの走向に支配されています。

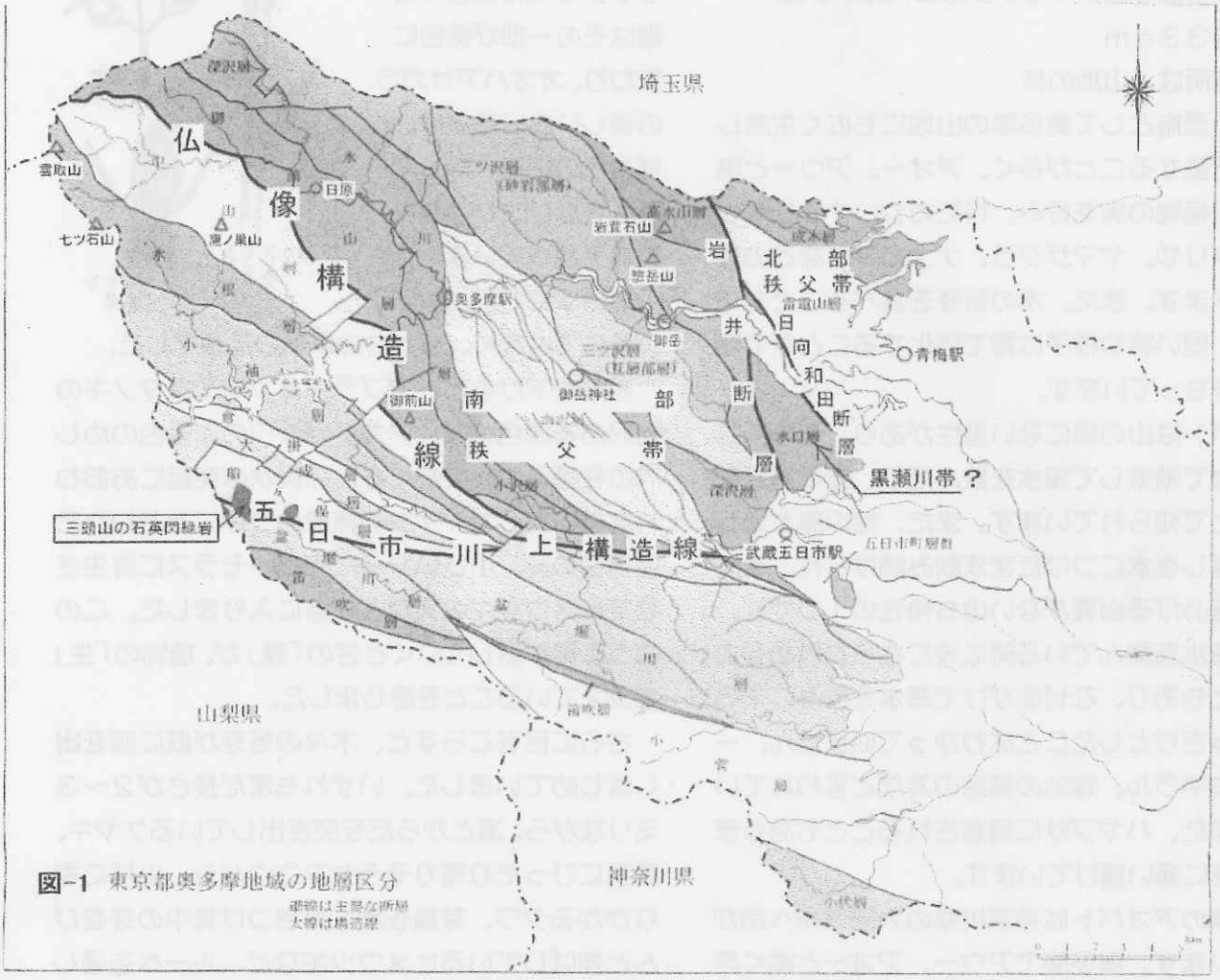


図-1 東京都奥多摩地域の地層区分
破線は主要な断層
太線は構造線

多摩川や日原川に沿った概略標高は青梅駅で 200m、奥多摩駅 340m、日原集落 620mと北西方向に向かって、徐々に高度を上げています。もともと概ね平らであった関東山地と関東平野は、造山運動で北西側が大きく隆起し、逆に関東平野側は沈下したために、西高の関東山地と東低の関東平野ができ、現在のような地形となりました。都内では雲取山が 2017m で関東山地の一角をなしています。

2. 地層の区分 図-1

地層は埼玉県秩父市に近い北東側が古く、南西側に行くにつれて新しくなります。東側の成木層や雷電山層は北部秩父帯に属し、その西南側の深沢層・三ッ沢層・海沢層・氷川層・御前山層などを南部秩父帯とよんでいます。南部秩父帯の西南側の、後述の仏像構造線と五日市川上構造線に挟まれた中山層・水根層・小袖層・倉掛層・大成層・船久保層は小河内層群と呼ばれ、更に五日市川上構造線の西南側は八王子市の高尾山を含む小仏層群で、各地層はそれぞれの特徴を有しています。三頭山付近では 750 万年前に貫入した石英閃緑岩と、熱変成を受けた硬いホルンフェルスが見られます。

3. 構造線・断層

秩父北帯と秩父南帯は、日向和田断層と岩井断層で切られています。上記二つの断層の間の氷口層は謎の黒瀬川帯とされ、ジオロジストの興味をそそっている場所です。また、御前山層と中山層の間にある仏像構造線は、払沢の滝西方の時坂峠付近で五日市川上構造線と近づき、戸倉の城山付近を通過後、イワタバコの花咲く逆沢を経て川口川沿いに八王子方面へ向かっています。この構造線は、はるか沖縄まで延びており、これより北側を秩父帯、南側を四万十層群に分けています。

○ 奥多摩山歩きに伴う足元の石の魅力

奥多摩では陸原生や、海洋性の岩石が交互に現れる場所や、その岩石がつくる特有の地形・植物がある一方、雲取山の山頂は海底で生まれた玄武岩でできている等々、足元の石たちも山歩きの楽しみを増やしてくれることでしょう。

（本渡康隆）

奥多摩の野鳥
～海水を飲む鳥～

今回はアオバトを取りあげます。

アオバト：ハト科　アオバト属

・頭部と背は緑色、額と腰から胸は黄色、下腹は白色、くちばしとアイリングはコバルトブルー

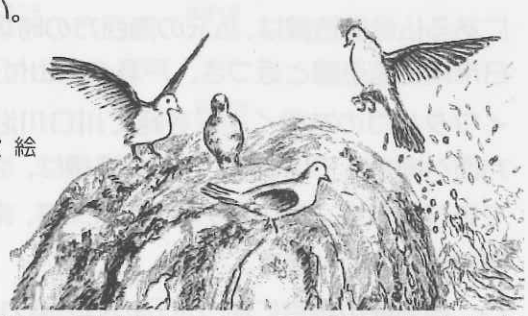
・全長約３３ｃｍ

・生息場所は、山地の林

留鳥、漂鳥として奥多摩の山地にも広く生息し群れで行動することが多く、アオー、アウーと鳴きます。植物の実を好み、特にカシ、ナラ類などのドングリや、ヤマザクラ、ナナカマドなどの液果を食べます。また、木の新芽を食べることもあります。固い実や種子は胃で消化することができる特性をもっています。

アオバトは山の鳥にない習性があり、海岸の岩礁に群れで飛来して海水を飲んだり、温泉湯水を飲むことで知られています。また、他の鳥と違ってくちばしを水につけたまま飲み続けられ、その都度顔をあげる必要がないのも特性の１つです。ただ、海水を飲んでいる時に波にさらわれ命をおとすこともあり、なぜ命がけで海水を飲みに来るのかはっきりとしたことはわかっていません。一説にはミネラル、塩分の補給の為だと言われています。また、ハヤブサに捕食されることもありますが海岸に通い続けています。

奥多摩のアオバトは神奈川県の大磯海岸へ命がけで通います。奥多摩でアウー、アオーと鳴く声を聞いたり、姿を見かけた時は無事に奥多摩に帰って来られるように静かにエールを送ってやってください。

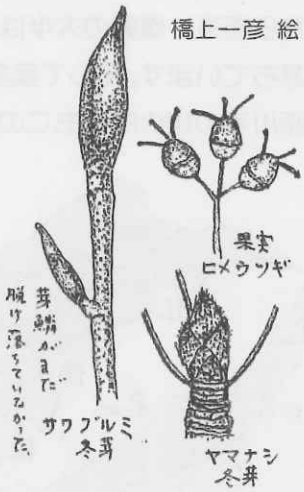


大澤新次 絵

（追記）　アオバトもハトの一種です。栄養豊かなピジョンミルクで子育てをします。これは栄養価が高いので他の鳥と比べて短期間でひなの巣立ちを迎える事が出来る大きな利点があります。

（畑幸夫）

奥多摩樹木雑考
～小さな秋を探して～



橋上一彦 絵

８月上旬、秋を探しに水根沢に沿って歩いてみました。見上げると、サワグルミの緑色の果穂はその一部が褐色に変わり、オオバアサガラの美しい白い花序は、淡黄褐色の果穂となって、長毛をなびかせながら垂れ下がっていました。そのいずれもが、枯れているのではなく、ひとつの成熟した姿でした。

視線を下げると、アブラチャンやイボタノキの光沢ある緑色の実、アカメガシワの赤褐色のめしべの柱頭を中心にたくさんの刺状の突起におおわれた丸い実、ヤマナシの無数のつぶにおおわれた淡褐色の実、小さいからだをユーモラスに群生させたヒメウツギの実などが目に入りました。このように実が熟していくときの「静」が、植物の「生」を支えていることを感じました。

さらに目をこらすと、木々の冬芽が既に顔を出しはじめていました。いずれもまだ長さが２～３ミリながら、凛とからだを突き出しているケヤキ、葉柄にぴったり寄りそうヤマコウバシ、小枝に寄りかかるクワ、芽鱗を腰に巻きつけ真中の芽をぴんと伸ばしているヒメウツギなど、ルーペを通して見る冬芽の個性的な形にしばし見とれました。まさに「神は細部に宿りたもう」（諺）を実感しました。木々の葉はまだみずみずしい緑をたたえていましたが、やがてこの文が載る頃にはその緑は色褪せていることでしょう。それは、光を吸収し、果実にまた冬芽に生の糧を注ぎ続けた緑であったからです。秋は“山よそおう”と言いますが、それは冬への“山が支度をする”意味ですね。そのすがたを、ゆっくりと歩くことで、夏の盛りに垣間見ることができました。

（橋上一彦）

果穂（かすい）：尾状に垂れ下がった果実の束

花序（かじょ）：花のあつまり

芽鱗（がりん）：冬芽を包むうろこ状のもの

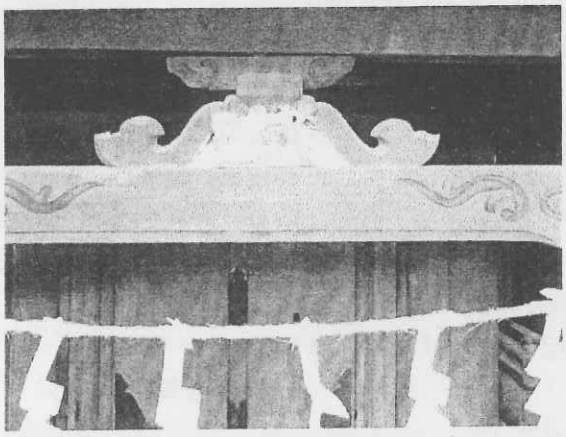
山里歩きの楽しみ

神社で動物探し

奥多摩には神社がたくさんありますが、タヌキやムササビを探すのではありません。山里歩きで神社を見掛けたら、建物を観察してみてください。真正面には、カエルがいます。左右にはエビもいます。そして獅子や獏（ばく）もいます。

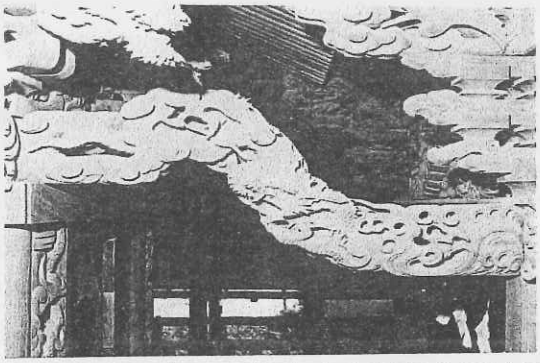
それでは、探し方のポイントを紹介します。

カエル（蟇股・かえるまた）



上の写真のようにカエルが股を広げている様な形をした支え木を「蟇股」と言います。大工さんの腕の見せ所で、装飾を施したものから単につっかえ棒程度のものまでいろいろ。主として建物の正面、或いは側面に見ることができます。

エビ（海老虹梁・えびこうりょう）



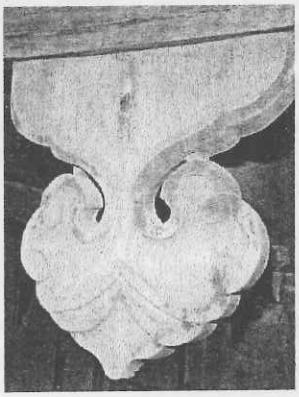
建物の左右にあって柱と本体を支えているエビのように曲がった梁（はり）を「海老虹梁」と呼んでいます。これも大工さんの腕次第で全面に彫刻が施されて美しいカーブしたものから何の変哲もない真っすぐな梁までいろいろあります。お薦めは、小河内温泉神社の海老虹梁です。

獅子と獏（ばく）

建物の上部左右の角、又は、四隅にいて、にらみを利かせ、神様を守っています。社前の狛犬や獅子舞の獅子と違い、建物に付随しています。

獅子は、神社に限らず寺院でも見かけますが、獏は、夢を食う動物とされ、鼻が長いので一見、象のように見えます。神社で見たら獏、寺院なら象と思ってください。

魚（懸魚・げぎょ）



建物の側面上部の破風の通称"拝み"のところに下がっている装飾で棟木や桁の先端部分を隠すもので、その形により「梅鉢懸魚」、「蕪懸魚」、「猪の目」などの名前がつけられています。日本全国どこへ行っても寺社の建物に見ることができ、様々な形を楽しめます。

東京都文化財ウィーク特集
「丹叟院・阿弥陀堂の公開」

１１月３・４日（土・日）の１０時～１５時

文化財ウィーク協賛事業で名人・達人観光ガイドの会が協力します。

見所は、薄幸の詩人・金子みすゞがうっとりするような小柄ながら美形の阿弥陀様です。ご対面にお出かけください。ほかに秩父観音霊場ゆかりの観音様が堂内に３４人お揃いです。奥多摩には、十一面観音が比較的多いのですが、１１人の観音様よりも３４人も観音様が揃えば、仏の世界もワークシェアー。より早く、より確実に願い事をかなえてくれるかも。ただし、お願いする側の心掛け次第でしょうね。　（岡崎　学）

秋から冬　奥多摩山歩き
～イベント案内　11月から1月～

No.25　11月14日（水）　倉戸山～紅葉を楽しむ～
No.26　11月16日（金）　紅葉真っ盛りの奥多摩むかし道
No.27　11月27日（火）　ﾌｯﾄﾊﾞｽ大氷川・南氷川・栃久保
No.28　12月　5日（水）　六つ石山～晩秋の石尾根
No.29　12月　7日（金）　見晴らしの丘･初冬の落ち葉ふみ
No.30　12月18日（火）　「山ふる」でそば打ち・野鳥・工芸
No.31　1月19日（土）　日の出山から大塚山
No.32　2月　3日（日）　城山・鳩ノ巣から急登に挑戦

多摩川上流水源地の歴史

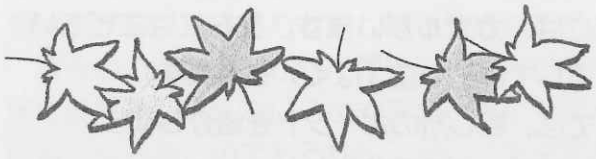
皆さん多摩川の上流地域、奥多摩町から山梨県甲州市塩山にかけての半分以上の土地の地主は東京都であることをご存知でしたか？東京都の説明によると多摩川上流水源地は江戸時代幕府によって「御止山」と言い禁伐林として保護されてきた。玉川上水（1653年11月開通）が開設され、江戸市民が多摩川の水を飲むようになってから徳川幕府は多摩川の安定した水を確保するため、上流一帯の森林を直轄地（天領）として手厚く保護した。しかし、明治政府になると、山林の官民区分、地祖改正などを契機に地元民の協力が得られず盗伐、開墾、焼畑などによって山林は次第に荒廃していった。

また、一之瀬高橋地区は戦国武田の時代、黒川金山の金堀人で戸数400戸をかぞえ大いににぎわっていた。そのため、燃料として木は切られ山林は消滅していた。そして明治時代になり、無断で山を焼いたり、盗伐して更に荒廃していった。奥多摩の水源林の荒廃が淀橋浄水場における明礬（ミョウバン）の使用量の増加につながっていることがわかり水源林経営の動機になった。明治34年栃久保の周慶院の敷地に東京府林業事務所を設置して水源林の経営を開始した。

天空へ向かって続く笠取山登山道
この右斜面が東京都所有の
水源林地帯

奥多摩地域情報局

10月20日、11月17日　白箸つくり　日原森林館
10月27、28日　奥多摩ふれあい祭り登計原運動場
11月　3、4日　　山のふるさと村秋まつり
1月27日､2月3日　山のふるさと村冬まつり



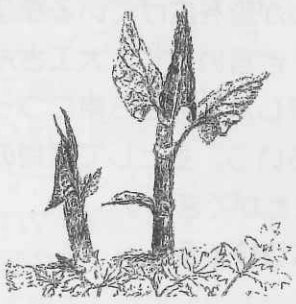
「すっかんぽ」って何のこと？

子供のころ道端にある「すっかんぽ」の若芽を取って皮をむいてそのまま食べたり、塩をつけて食べたりしました。答えはイタドリです。

昔から若芽を山菜として利用し、葉をもんで、すり傷や切り傷につけると、血が止まり、痛みが取れるところから、「痛取り」イタドリと、また、若い芽をかじると酸っぱいからスカンポ、奥多摩では「すっかんぽ」と呼ばれていました。

（奥多摩町史から）

すっかんぽ



大澤新次　絵

*** ムササビ（奥多摩ではばんどり）***

日没後ジーっと空を見上げていると、近くの杉の木からスーッと音もなく飛ぶ大型滑空リス、それがムササビです。奥多摩では奥氷川神社や根元神社に行くとムササビの巣を見つけることが出来ます。又その木の下には丸い糞もあります。ケヤキの木の下には、ケヤキの実を食べた後の小枝がたくさん落ちています。氷川渓谷を散策した時に探してみてください。

（小峰　一郎）

次号発行予定：平成31年1月15日

発行　一般社団法人 奥多摩観光協会
住所　〒198-0212　奥多摩町氷川210
電話　0428-83-2152 FAX 0428-83-2789
編集　名人・達人観光ガイドの会